

森山多吉郎とプロイセン人

Günter Zobel

ごく身近な日本史事典などから得られる、森山の経歴についての手がかりはそう多くはない。しかしそれらの記述からも、通詞としての彼の目覚ましい活躍の基礎を築いたと思われる二つの重要な事実を読み取ることができる。

一つは彼に通詞という公職を継がせた長崎の家族である。彼はその家族からオランダ通詞として必要な知識を受け継いだ。

もう一つは第2の外国語としての英語、正確に言えばアメリカ英語との出会いである。当時彼は30歳になろうとしていたが、英語は諸外国との交渉に必要性を増しつつあった。彼に英語を教えたのは、冒険家で、日本に密入国を計り船から海に飛び込んだラナルド・マクドナルド（1824-1894）であった^(注1)。彼は1848年から49年にかけて、幕府により長崎にある寺院の小部屋に罪人として幽閉されていた。

1862年、遣欧使節の一員として出発する前、彼の英語の会話力はそれほどめざましいものではなかった。そのことについては後で述べるように福沢が目撃することとなる。しばしば言及される彼のプロとしてのプライドは、家族に代々受け継がれた財産であるオランダ語の知識に基づいていた。オランダ語はベルリンでのプロイセン王との謁見の席で、またペテルスブルグでのツアーとの謁見の際の挨拶の公式な言語として使用された。使節団の代表、竹内保徳の挨拶は森山のオランダ語からドイツ語とロシア語に通訳された。その返答はちょうどその逆に日本語に訳され伝えられた。

1868年の明治維新後、森山はそのすばらしい経験とキャリアにもかかわらず、公職を願い出ることはなかった。彼は東京小石川に私立の英語塾を開設

し、日本初の英和辞書（エゲレス語実相和解）の編集に携わった。それらは数々の文献に記されているが、彼の言語学的業績の第2の側面であると言える。しかし彼のもう一つの功績は、ペリーが鎖国状態の日本と呼ばれる島国を強引に開港させて以来、日本を次々訪れる諸外国との数えきれない交渉や会議の席での惜しみない尽力であった。

以上のようなことから、彼は単にオランダ通詞というだけではなく、厳格さと頑固さで評判の、天賦の才に恵まれた近代的な外交官の先駆者の一人であったということができであろう。時には、交渉相手には、異なる文化の異なる教育を受けた彼が何を考え、何を意図しているのか読み取ることができなかった。そのことも彼が手強い交渉相手であるとの評判を高めた理由の一つとして挙げられるであろう。彼は将軍には忠実であったが、同僚の目には危険と思われる立場に身を曝し、行き詰まった交渉を打開する道を見いだすことも幾度となくあった。しかしそのような事実は今日ではあまり知られるところではない。また後続のページでも触れるが、彼の強靱で常に信頼できる人柄は諸外国高官が好意を寄せるところでもあった。

プロイセンの日本使節団とは、1862年7月ベルリンで再会しているが、それは彼の外交官的なキャリアの中で最も重要な出来事として位置づけられるに違いない。その再会は、数年前の江戸での交渉の経験を思い起こさせるものであった。それはまさに、交渉の最前線で苦勞の末に手にした成功の喜びや達成感を思いださせる至福のひとつときであった。「通訳兼外交官」または「外交官兼通訳」森山多吉郎が人生の重要な時期に手がけたプロイセンとの困難な交渉の一連の過程を、エピソードなどを織り込みながら、現存する資料を手がかりに記述してみたい。

*

主席通詞であったこの幕府役人が使節団の1862年プロイセン滞在時に残した足跡を辿ったり、あるいは、この外交使節団での彼の任務がひょっとして記録されているのを見つけたりしようとしても、ベルリンの新聞雑誌を見ればそ

んな期待は裏切られる。ラザフォード・オールコック卿すなわち初代イギリス公使と共に、既に二ヶ月早く出発していたロンドンへの派遣団の後を追うことが、恐らく派遣期間中の彼の最重要任務であった。そして、オールコックは二巻から成る自らの回想録『大君の都－幕末日本滞在記』^(注2)で何度も森山の名前を挙げ、またその人物を非常に高く評価して、これをいつまでも残る彼への記念とした。

折に触れてのオールコックによる森山についての記述と並んで、ヘンリー・ヒュースケンの著書『日本ジャーナル1855-1861年』においても森山について書かれた多くの箇所が、彼の関与の在り方、発言や行動を探り当てる大切な情報源となっており、これらの箇所は索引にある頁数から特定できる^(注3)。ここには、通常に通訳や翻訳の仕事の一つ一つがまとめられているだけではなく、例えば彼が将軍の歴史的・当世的立場についての議論をした時のことなども持ち出して、その人間性にまで言及している(190～192頁)。

オランダ語通詞としての森山に関する最も有名な話と言え、詳細な文法知識への強い自負であろう。だが、その知識が時代遅れの教本から仕入れたものだったことが自明ではある。このことは、ある言葉の選択を巡って森山とヒュースケンが公然と論争する事態へと繋がっていく。それはアメリカ総領事ハリスが、森山の能力に揺ぎない信頼を寄せていた信濃守と交渉してアメリカに有利に修正された形の貿易条約を勝ち得ようと努めていた1858年2月に起こった(192頁～193頁)。オールコックは、オランダ生まれのオランダ人に、そのオランダ語が正しくないことを分からせようとして一人の日本人が言葉につかえながら教え諭している愉快的場面を文にしている(前掲書102頁)。しかし横浜の初代プロイセン公使マックス・フォン・ブランド^(注4)は、こうしたことに関し、森山を次のように描写している。

日本人通訳の長である森山は、外国使節団全員の間で、名が通り、また人気のある人物だったものの、それでもやはり次のような場合には

おかしなところがあった。彼は、何百年も前に自分の先祖が学んだオランダ語を話したり書いたりしている一方、使節団に任用されているオランダ人が現代の言葉を喋っているからという理由で、彼らが自分たちの母語を知らない、と大真面目に主張したのである。(111頁)

1862年、日本人のヨーロッパ外遊の際には、どうやらベルリンも含めて、通詞本来の仕事は年若な部下の者たちに任されたい。彼らは後に、例えば福澤の回想録で、またベルリンの新聞雑誌で一、二度、名前を挙げて言及されている。森山が春に江戸を出発する時に託された高度な任務、すなわち、幕府からの秘密の指示をロンドンの使節に伝えるという任務が、使節団で指導的立場にある23人のうちの、さらに主席通詞の地位に、少なくとも、森山を留めていたのである。実際彼は、7月21日のベルリンでは三使や組頭の後ろの二列目に並んで王の前に出ることを許された四人の随員の一人であった。彼は、読み上げられた將軍の挨拶状をオランダ語に訳した人物であったという。そしてこの挨拶状は、プロイセンの通訳によってオランダ語からドイツ語に訳された^(注5)。だが、新聞雑誌の報告の中に彼の名前は出ておらず、それらは専ら派遣団のトップに在る三使の名前のみを挙げていた。

ベルリンでの森山についての唯一の記述が、これの一年以上前に日本への旅に参加したある人物による回想書に見出される。ライプツィヒの作家グスタフ・シュピースは「ザクセン商工会議所全権委員としてプロイセン国王陛下のスクリュエ付コルヴェット艦『アルコナ号』に同乗し」、帰国してすぐの1863年にこの事業についての記述をものした^(注6)。最初の九章は「ヨーロッパから日本へ」として第一部になっているのだが、挿絵をふんだんに付した一九章からなる書物の短い結びの言葉のところには、三使すなわち竹内と松平、そして京極の写真も掲載されている。恐らくは宮廷写真家L・ハーゼの写真からとったものであろうが、これには彼らがベルリンにやって来たときのことについて短く言を付してある。

使節団はベルリンで国王ヴィルヘルム一世陛下の荘厳なる引見を受け、そして彼らの榮譽を讃えて軍事演習等が幾つも催された。私自身はこの時期また偶然にベルリンに居合わせ、古い友人であるムリヤマ（原文まま）から、彼らはドイツが格別に気に入ったということ、それはやはり、江戸に居たことのあるプロイセン使節団の人々との友情を新たにし、故国について彼らと歓談することができたが故であることを聞いた（426頁）

日本使節団はケルン・ドイツ地区でアウグスト・オイレンブルク伯によって出迎えられ、ベルリンでは度々の同行を受け、また最後はシュヴィーネムンデまで送ってもらった。オイレンブルク伯を始めとするプロイセン使節団の人々との再会は森山にとって、1860年から1861年にかけて日本とプロイセンとの間に最初の協定を成立させるために努力したことを嬉しく思い出させてくれるものであったに違いない。実際、彼は両国代表のあらゆる出会いに寄与した自らの尽力を誇りに思うのが当然のことであっただろう。彼の尽力により、使節たちはこうしてプロイセン王の前に立った。森山にとってのクライマックスが訪れたわけである。

彼は、プロイセンの東アジア使節団参加者による回想録の多くで特に言及を得ており、また、1861年1月24日に条約署名が行われた時に主席通詞を務めたことにより多くの歴史研究で取り上げられてもいる。というのも、数ヶ月に渡って長引いて進捗を見ない交渉の間中、森山は困難な事柄を翻訳するばかりでなく、極度に緊張しながら調停までせざるを得なかったようなのだ。数ヶ月の間に、外国人を敵対視する日本人と西洋諸国の全権代表や貿易担当者との間に繰り返し起こる大小の摩擦は、歩み寄りへの試みをしてその度に、双方にとって満足のいく解決策へ向かう道程の大きな心理的障害となっていたのである。

年代的に見ると、貿易を巡るドイツとの繋がりについての日本での最初の

記録となった、商人フリードリヒ・アウグスト・リュードルフの1855年の日記『グレタ号日本通商記』に、森山の名前が初めて、それも彼の前の呼び名であった栄之助で出てくる^(注7)。この中で、森山が初めて「急場を務めた」時のことが書かれているが、このように「急場を務める」者としての登場の仕方は、後になっても、政府が困難な状況で彼を用いる時の典型的な在り方となるのである。

幕府側から差し向けられた最初の日本人通詞は、リュードルフが下田の奉行に宛てて、「ドイツ」全体に対して貿易関係を結ぶ条約を願い出た手紙を届けず、上司から職を解かれた。リュードルフの請願に反対であった堀辰之助^(注8)は、本人の弁によれば、この手紙を浄書の手本に使っていた。そして、9月18日、当のドイツ人リュードルフの日記には次のようにある。

午前の中に、奉行所の役人数名が、私がこれまで知らなかった通詞一名を伴ってやって来た。この通訳は森山イエノスケエ（原文まま）で、神奈川の条約の際に通訳を務め、現在は軍事面で高い地位に就いている人物である。役人らは、8月11日に通訳のタツノウスキ（原文まま）に渡した手紙に関する件で私に尋ねるよう、奉行から指示されていた。（150頁）

その後、リュードルフは自著の中の「歴史についての序文」で、ペリーが数名の奉行および政府高官らとはじめて公式に会見した3月8日に、前年のアメリカ大統領書簡に対する返答として受け取った書簡のドイツ語訳を記載しているが、これはペリー提督と交渉時の森山の尽力についての記録となっている。この書簡の最後の段落には次のようにある。

最終的には、これが、船が必要とするであろうすべてであり、我が国の生産物によって供給可能にして我々が調達するすべてと考えます。

商物品の価格は黒川嘉兵衛と森山栄之助が決定することになります。これまでに触れた諸事項について合意した後、条約は締結完了となり、次回会談で調印されます。(30頁)

この全体に対し、1854年2月23日の日付と「森山栄之助」の署名が付されていた。アメリカの望みを受け入れる意向と彼の諸提案を含むこの書簡は、3月31日に署名されて6月17日に補足の行われた神奈川条約の基礎となった。

アメリカ人との条約交渉および締結に関与した際の評判が、日本においても森山の立場を強くした。福澤諭吉は自著『福翁自伝』で、オランダ語だけでは、西洋研究のために将来十分であろうはずもないことを思い知ってから、森山の下で英語を学ぼうとしたことを語っている。英語教師を見つけることは、当時の江戸ではとにかく非常に難しかった。

けれども段々聞いてみると、その時に条約を結ぶというがために、長崎の通詞の森山多吉郎という人が、江戸に来て幕府の御用を勤めている。その人が英語を知っているという噂を聞き出した(中略)森山の言うに「昨今御用が多くて大変に忙しい、(中略)については毎日出勤前、朝早く来い」(中略)。ところが(中略)教える暇がありはしない。そうすると、晩に来てくれぬかと言う。(中略)ところが(中略)矢張り同じことで、(中略)どうにも暇がない。(中略)加うるに森山という先生も、何も英語を大層知っている人ではない、ようやく少し発音を心得ているというくらい。^{とて}逆もこれは仕方がない(後略)^(註9)

オールコックが明らかにしているのだが、森山は自分の英語に欠けていた部分を、1862年の春ロンドンへ国際使節団で渡航した折に補った。加えてオールコックは、森山を同行させるよう自分が幕府に申し出たのを後悔したことなどなかったと明言した^(註35)。一年半前、森山はまだオールコック以外の外国人、

つまり既出のフリードリヒ・オイレンブルク伯に仕えていなければならなかった。伯は当時、プロイセン公使として関税同盟の全加盟国、メクレンブルク・シュトレリッツとメクレンブルク・シュヴェリーン両公国、ハンザ同盟三都市すなわちリューベック、ブレーメンおよびハンブルクのために、条約を締結しようとして努力していた。「オイレンブルクはこの協議に当たり、有能な、交渉のテーマについてのエキスパートとしての森山を知り、日本の交渉団の中で彼こそこの案件について何がしかのことを弁^{わきま}えている唯一の人物であると考えた。けれども森山は『いまましい男』であって、オイレンブルクを絶えず悩ませたそうである」^(注11)。

それでも、フリードリヒ大王生誕日の1861年1月24日には幸運にも締結となり、オイレンブルク伯と、村垣淡路守、竹本守、黒川の各奉行は23の項目と別個の通商規定をもつ条約に調印した。

厳粛な調印式には、現在赤羽にいるドイツ使節団の全員が立ち会った。日本の全権代表らが署名した筆を、それが本物であることを通詞森山タクツィロ（原文まま）が証した書状とともに、署名人ヴィルヘルム・ハイゼが受け取った。使節のペンを村垣淡路守が預かった。筆とペンのどちらも、信頼のおける条約履行の印とみなされた。^(注12)

江戸に滞在していた者すべてにとって、そもそも条約締結にこぎつけたということが奇跡のように思われた。遅々として進まなかったオイレンブルクと奉行らとの交渉の末、奉行の一人である堀利熙^{としひろ}は、交渉における自らの任務に失敗したと恐らくは考え、作法に則って自死した。プロイセンとの協議にこのことが落とした影は、最早過激なテロ行為をも辞さない多くの浪人たちに見られるような外国を敵視する要素によって、強められていった。1月15日、アメリカ使節のはからいでオイレンブルクの用務も果たすために差し向けられていた、前出の通訳ヘンリー（またはヘンドリク）・ヒューステンが惨殺されるに

至った。彼は、夕方赤羽地区にあるプロイセン公使の公館を出て家路にあった時、武器を持った警護の日本人役人三名が付いていたにも拘らず、日本橋に近い公道上で殺害された。それからと言うもの、500人の浪人どもが横浜への途上に在り、その地に住む外国人全員を殺害しようとしているとの噂が専らとなるのである。

けれども、それでもやはり、良い結果へと繋がる急激な状況の変化がうまい具合に起きたのである。それと言うのも、関税同盟全体が対象の条約ではなくプロイセンのみが対象の条約なら得ることができるのだと、この間にオイレンブルクが悟ったからであった。それはまた、森山という「いまいまい男」のせいでもあったことは確かである。森山はこの交渉相手に対して、可能なことが何で、日本側に要求しても無理なことが何か、ということ、をはっきりと、また時には頑固に、繰り返し分からせてくれたわけなのだった。彼は、前任者が1855年にリュードルフとの交渉でしてしまったように隠し立てをしたり何かを隠蔽したりすることはせず、交渉時にたとえ外国人らから「いまいまいしく」不愉快で強情であると思われても、彼らを成功への正しい道筋に導いたと言えるだろう。何れにせよ、1861年1月24日からのプロイセン・日本間の条約に寄与したということでも、彼を無視することはできない。

だから、後に回想録をまとめたドイツ側の一連の担当者も皆、彼のことを書かずに済ませてはいない。かなり後になってからの例として、公使オイレンブルクが乗船していたスクリュー付フリゲート艦「アルコナ号」の戦隊に属していた輸送船「エルベ」の司令官がいる。後に「ドイツ帝国海軍大佐」となったこのラインホルト・ヴェルナーは、既に1861年から62年にかけて、F・A・ブロックハウス出版から出ていた有名な『ドイツ総合新聞 *Deutsche Allgemeine Zeitung*』の通信員として、定期的に、遠方から『中国および日本へ来たプロイセン使節団団員からの手紙』を送っていた。

読者に非常に好評を得たことから、彼は、この通信記事に補足を加えて本の形でもう一度発表するようにとの依頼を受け、1863年にこれが実現した^(註13)。

10年後には更に第二版がライプツィヒのブロックハウスから出ることとなった。彼は、割り当てられた赤羽の家に公使が、華やかな軍事的行列を伴って1860年9月8日に入った際の記述で、日本の高位高官の人々の列にあって自分に相応しい場所に居並んでいた森山のことに、既に言及している。

果物とお茶とケーキの朝食を接見室で摂った後、酒井壱岐守、堀織部正の両奉行が、目付一名と通詞の森山多吉郎および数多くの従者を伴って現れた^(注14)。

ここでまた、欧州への後年の使節団外遊を描写する際にも音楽のライトモチーフのようにして繰り返し注意を惹き付け続けるテーマが立ち上がってくる。例えばここにある「目付」については、福澤諭吉は公然と名前を挙げているし、プロイセン側でも新聞雑誌に書き留めている。ユリウス・ローデンベルクが編集していた『ドイツ・マガジン』においてもやはり、次のように書かれている。

偵察という仕事は日本では合法的であり、残念なことに政府はそれに支えられている。日本の国民の半分が他の半分を見張っている。この人たちはこれを良くないことだとは思っていないので、自分たちの名刺には次のような素晴らしい役職名が書いてある。「將軍の偵察員」^(注15)

1860年の、プロイセンと日本の初めてのこの邂逅の際、日本の重大な関心事の一つは既に明らかだった。自著に、ヴェルナーは次のような出来事のことも記した。

奉行らが辞する際には、庭に配備された隊列による軍事的行事が彼らに敬意を表して行われ、彼らは非常に満足し、また、撃針銃を望んで

見せてもらっていた。弾丸込めが簡便で楽なことに、彼らは少なからず驚いていた。それにまた、摩擦によって発射のための点火を引き起こす針の効果を、彼らは素早く理解した。マッチを擦って点火するときに起きる事象との類似を即座に把握したのである。

更にオイレンブルクは、二、三人の侍たちが、使節団の一人の警備兵に、銃を貸してくれるようにとドイツ語で説得しようとしていたことを伝えた^(注16)。この報告の中で剥き出しの好奇心との感を与えたものは、次の欧州派遣時には、池田長発^{ながおき}（1837～1879）の下、差し迫った交渉の論点として持ち出されるまでに至った。彼らはプロイセンの撃針銃を買い付けるように指図を受けていたのである。その理由は、自国内の浪人たちを駆逐するため、とのことだった^(注17)。

使節団のある随員が、ベルリンで、刀の刃の部分を出して見せるよう望まれたとき、「われわれは敵の前でのみ刀を抜くのです」と、丁寧にかつきっぱりと断ったことがあった^(注18)。こうした態度は賞讃の対象になるようなことではなかったかも知れないが、十分に理解されたであろうし、日本において、人々がやはり戦いについて高い倫理観をもち、また武器について強固な節度をもっていた証と思われたのである。それが二年後には、彼らは突然、自分たちの政敵を凌ぐためにどうしても最良の自動武器を大量に得たいと言って無理な要請をしてきたのであった。

*

上記の論文は、東京にあるドイツ東洋文化研究協会（OAG）により2002年に“Die Japanesen in Berlin” – Der Besuch der ersten japanischen Expedition von 1862 im Spiegel der Presse – のタイトルで出版され、早稲田大学大学院文学研究科（ドイツ文学専攻）卒業生の平崎（高橋）久美子氏により和訳された拙著の第4章部分に、森山の経歴について加筆し、若干の修正、訂正を加えたものである。

この章は、日本初の遣欧使節団についての早稲田大学研究プロジェクト(1998年～)のタイトル「1862年の遣欧使節－森山多吉郎を中心に－」を受け、森山についての考察をまとめたものである。森山の多面性を持つ性格や、奥深い人柄に初めて注目されたのは、政治経済学部教授(当時)の武田勝彦氏であった。私もこの論文を執筆するにあたり、幾多の歴史的書籍や論文を繙いたが、彼の歴史的役割や人となりが明確な輪郭を持つようになるにしたがい、森山という人物が私自身の中で重要性を増してくるのであった。そのような意味でこの章は、森山に捧げるための章とも言える。

今回この部分を独立した論文として翻訳・印刷することになったのは、同僚であり、2005年早稲田大学出版部から出版された『ヨーロッパ人の見た文久使節団～イギリス・ドイツ・ロシア』(本書では今回の部分は割愛されている)の共同執筆者の一人である鈴木健夫教授の助言による。氏には上記の出版に際しても、編集、校正の労を執っていただいた。この紙面を借りて心からの謝意を表したい。

“Die Japanesen in Berlin...”(図版7、P.63)、『ヨーロッパ人の見た～』(71頁)で掲載した森山の写真は武田勝彦教授から拝借したものである(原板はデン・ハーグのRoyal Archive)。本論文では他の図版、写真とともに割愛してあるが、興味をお持ちの方は上記2書をご覧いただきたい。

注

- (1) MACDONALD, Randal: *Japan, Story of Adventure*. Ed. By William S. Lewis & Murakami Naojirō (1923)
- (2) ALCOCK, Rutherford: *The Capital of the Tycoon. A narrative of a Three Years' Residence in Japan* (2 vol., London 1863)
- (3) HEUSKEN, Henry: *Japan Journal 1855-1861*, ins Englische übers. und hrsg. v. CORPUT, Jeanette C. van der und WILSON, Robert A. (Rutgers University Press 1964)
- (4) BRANDT, Max von: *33 Jahre in Ost-Asien. Erinnerungen eines deutschen Diplomaten*, Bd. 1 (Leipzig 1901)

- (5) BEASLEY, W.G.: *Japan encounters the Barbarian, Japanese Travellers in America and Europe* (Yale University Press, New Haven & London 1995), p.85.
- (6) SPIESS, Gustav: *Die Preußische Expedition nach Ostasien während der Jahre 1860–1862. Reise-skizzen aus Japan, China, Siam und der indischen Inselwelt* (Leipzig 1864)
- (7) LÜDORF, Friedrich August: *Acht Monate in Japan nach Abschluß des Vertrags von Kanagawa*, eingel. u. neu hrsg. v. Jürgen Schneider (Beiträge zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte, Bd. 21) (Wiesbaden 1987)
- (8) STAHNCKE, Holmer: *Friedrich August Lühdorfs Handelsexpedition nach Japan* (OAG aktuell, Nr. 39) (Tōkyō 1988), S.39-40.
- (9) FUKUZAWA, Yukichi: *Eine autobiographische Lebensschilderung. Übersetzt u. mit einer Einleitung von Gerhard Linzbichler* (Tokyo 1971), S.117-118. 福澤諭吉『新訂福翁自伝』(富田正文校訂)、岩波文庫、1978年、100–101頁。
- (10) R. ALCOCK, Rutherford, a. a. O., p.401.
- (11) H. Stahncke, a. a. O., S.40. EULENBURG-HERTEFELD, Philipp zu: *Ostasien 1860–62 in Briefen des Grafen Fritz zu Eulenburg* (Berlin 1900), S.142より引用。
- (12) Kölnische Zeitung Nr. 119 v. 30. April 1861. KERST, Georg: *Die deutsche Expedition nach Japan und ihre Auswirkungen* (Cram, de Gruyter, Hamburg 1962), S.16より引用。
- (13) WERNER, Reinhold: *Die preußische Expedition nach China, Japan und Siam in den Jahren 1860, 1861 und 1862* (2.Aufl. Leipzig 1873)
- (14) Ebd., S.292.
- (15) Deutsches Magazin, Illustrierte Monatsschrift, 1862/II, 9/S.215.
- (16) EULENBURG-HERTEFELD, a. a. O., S.131-132.
- (17) STAHNCKE, *Die diplomatischen Beziehungen zwischen Deutschland und Japan 1854–1868* (Studien zur modernen Geschichte, Universität Hamburg, Bd. 33) (Stuttgart 1987), S.166より引用。
- (18) “Unsere japanesischen Freunde auf Reisen und zu Hause”: Deutsches Magazin, Illustrierte Monatsschrift, 1862/II, 9/S.214.